

Book Review



細菌学的アプローチによる 歯内療法 of 臨床

バイオフィーム感染症として捉え解決に導く

石原和幸・阿部 修 著



Reviewer

木ノ本喜史 Yoshifumi Kinomoto

(大阪府吹田市・医療法人豊永会きのもと歯科
大阪大学大学院歯学研究科臨床教授)

A4 判変, 96 頁
カラー
定価 6,600 円
(本体 6,000 円 + 税 10%)
医歯薬出版刊



一般的に歯内療法においては、どのような手法を用いて根管を形成・洗浄・充填すれば、トランスポーテーションなどの偶発症を予防して、効率的に感染が除去できるかを考える。一方、本書では近年の最小限の根管形成を行うコンセプトの Minimally Invasive Endodontics (MIE) を踏まえつつ、バイオフィーム感染症として歯内療法を捉え、感染の程度や存在部位を考慮して、それに適した手法を選択するという視点から構成されている。つまり、バイオフィーム感染症を排除するという目的のために、さまざまな器具や手法を手段として位置付けている。本来、医療における目的と手段は、この成り立ちであるべきであり、器具や材料に関する情報が溢れている現在の歯内療法の状況に、本書は注意を喚起しているように感じた。

それでは本書の内容を紹介しよう。本書は序論と5つの項目から構成されている。

まず序論では、バイオフィーム感染症として捉えた治療戦略について、さまざまな視点から、お二人の対談形式で述べられている。講演会などの質疑応答でよく出てくる質問に対する回答

が随所に示されており、本項を読むだけで歯内療法における原理原則をおさらいすることができる。

「1」「3」「5」のパートを阿部先生が執筆されている。まず「1」では、近年のニッケルチタンファイルの進歩により可能となった MIE による根管形成に対して、微生物学的観点からの問題提起がされている。形成量を抑えることは機械的清掃ができていない部位を増やすおそれがあり、化学的清掃に頼る治療となるが、根管内のバイオフィームに対する化学的清掃の効果の検証はまだ十分ではないことが示されている。「3」では根管内のバイオフィームの質を考慮した歯内療法が提案されている。歯内疾患の病態を根管表面に想定される感染の程度により分類し、それらに対して根管形成において使用する器具について検討している。「5」では根尖部の残存細菌を減少させるための根管洗浄などについて、詳細に述べられている。

「2」と「4」を石原先生が担当されている。「2」では近年進歩している次世代シークエンサーを用いた細菌叢のマイクロバイオーム解析について述べられ、根尖性歯周炎の予後の診断に

応用可能な細菌の病原性に関わる研究の現状が披露されている。「4」では、バイオフィームに対するさまざまな根管処置について、基礎的な観点から解説されている。

全般を通じて、臨床家である阿部先生の項目では、根管細菌の全量を減少させ、疾患が引き起こされる量以下にできれば、生体の免疫力によって病変は治癒に向かうという原理原則を理解して処置することの重要性が繰り返し説かれている。研究者の石原先生の項目では、根管にできたバイオフィームが根尖性歯周炎の主要な病因であるが、まだどの菌種が病因に関わっているかは明らかではない。ただし、今後のデータ解析により、確実性の高い診断法や効果の高い治療法の開発が進む可能性が示されている。

本書は原理原則に基づく歯内療法を実践するための理論をまとめた最適な書籍であり、治療を繰り返しても治らない症例に面したときに心強い参考書となることは間違いない。若手からベテランまで広い世代の先生に手に取っていただきたい書籍が発刊されたことを感謝します。